平成 22 年度　帰国隊員/青年支援プロジェクト　実施報告書　　提出日　2011 年　６月　１２日		
氏名：　横尾咲子	実施国：　メキシコ	協力活動
活動名称	メキシコ・オアハカ州のインディヘナ居住地域における創作紙芝居プロジェクト～民族の誇りと表現力の向上を目指して～	

（1）計画通りに実施されましたか？運営面・経理面での変更点はありましたか？

全く計画通りにはいきませんでした。

実施場所と対象が変更になったので、それに伴い、実施内容、経理等、かなり大幅に変更せざるを得なくなった。現地機関との交渉等、事前の詰めが甘かったのと、やはりお国柄で、直前まで様々なことが不確定で、計画が簡単にかつ急に変更したり流れたり、という点が原因です。今後要注意です。

（2）実施の結果（良かった点、反省点を含めて）

計画通りにいかず、現地に来てから様々なプロジェクトを敢行した、という結果になってしまったため、準備不足や完成度の低さ、という点は多々あったが、これもまたお国柄で、その瞬間は参加者がかなりの興味と集中を示し、積極的な学びの姿勢と熱い意見交換があり、各回とも充実した時間となり、有意義な草の根国際交流となった。シンプルさとインパクトの大きさを兼ね備え、様々な場面に応用可能な「紙芝居」は、公演でもワークショップでも、人々を魅了しており、今後も「紙芝居」研究とその伝播は活動の中心に据えていきたい。自身の専門である「身体表現」に関しても好反応を得られたが、さらなる研究とメキシコおよび個人個人に適したアプローチができるように鍛錬が必要である。今後は、とにかく現地人脈を広げ、活動の場を増やしていくこと、とくに公的機関へのアプローチを続け、運営・経理とも計画的に進め、持続可能なプロジェクトを、どっしりと土台をもって実施せねばならない。

ミーティングの様子（上、右）

（3）異国の参加者同士または本人が相互理解を深めたと確信できた場面は？ 　　または実施事業に対する一般の反響は？「協力活動」
参加型の「紙芝居」上演で、演者である私と観客兼参加者であるメキシコの人々が、一体になる瞬間、そこには素直なコミュニケーションと共感があり、「紙芝居」のもつ魔力とともに、国や年齢・性別を超えた心の交流を実感できる、素晴らしいひとときである。また、身体表現のワークショップでは、特に言葉や習慣などを超えて、からだ(心と頭と切り離せないから)を通じて共感するとき、先入観を振り払った、率直な相互理解が得られる。言葉を介さないコミュニケーションによって、改めて、国は違えど同じ仲間、違いを意識しすぎることで生まれる障壁、からだへのアプローチの必要などを実感した。一般の反響は、概してよかった。子どもは特に素直だが、非常によく反応してくれ、たくさんの笑顔が咲いた。計画性や自身のスペイン語レベルはこちらが気にするほど問われなかったが、やはり常に課題である。
（4）社会への効果（実施事業がどのように社会に活かせるか、活かしたか）
草の根活動なので、対象者数は限られており、社会への効果を急激に望めるものではない。しかし、狭く深くの活動を、長期的に現地のネットワークを構築しながら進めていけば、「社会への効果」といえるだけに成長できると信じている。具体的な効果の１つは、紙芝居や舞台芸術、日本語、折り紙などの日本文化紹介によって、日本への興味・関心を、青少年を中心に持ってもらうことで、今後の日墨友好に貢献する人材を育成しうること。もう１つは、「身体」を重んじた活動を通して、「国違えど、結局は人と人」という感覚をもってもらい、先入観や文化背景などに囚われず、違いを積極的に受け入れる、人間同士のコミュニケーションを可能にしうること。現段階では達成できていないが、今後の課題として、社会への効果を見据えて、着実な活動を実施していきたい。